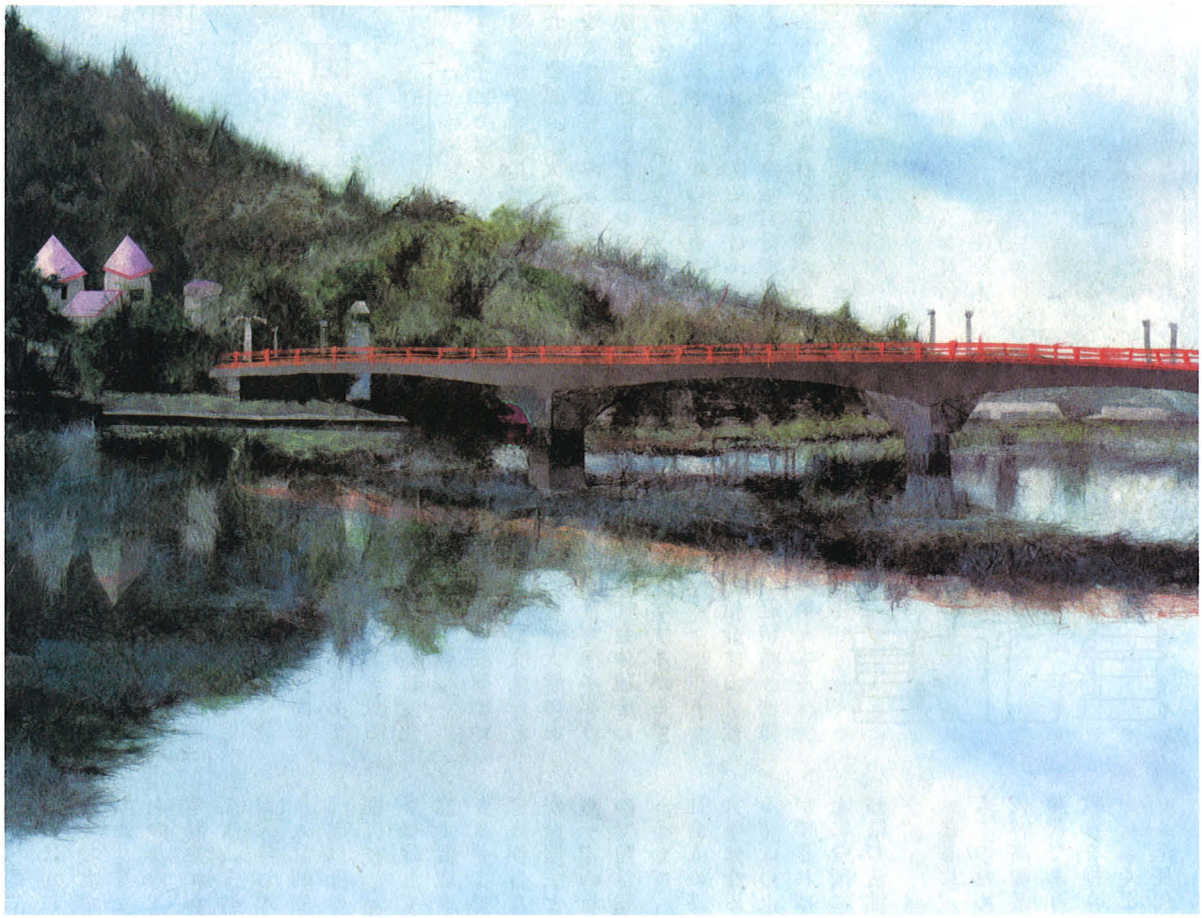
子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1998年7月1日発行　［隔月発行］

文化高知

'98年7月　NO.84



「かぜ薫る」北村霞代子

(財) 高知市文化振興事業団

社会人の高等教育の時代

福田善乙

いま、高知県で子どもたちの「低学力」が問題視され、「低学力」の指標として大学進学率の低さを指摘する。そして、大学進学率アップへハッパがかけられている。

しかし、私は子どもたちの大学進学率を上げることも大切かもしれないが、それ以上に現に高知県に住んでいる意欲ある大人（社会人）たちの大学教育を充実することがより重要であると思う。なぜなら、高知県民のうち大学を卒業した人たちの比率は五・二％で全国平均八・七％より著しく低く全国第三十七位であり、同時に大学で学びたいという社会人の欲求も著しく強く、リカレント教育（人間として豊かになるための生涯学習）にもなるからである。

そもそもわずか十八歳で自分の人生の目的と適性を的確につかみ、大学に進学する子どもはそんなに多くないのではないか。現に私は経済学を勉強したいと思って大学に行ったわけではなく、大学で学ぶなかで経済学の必要性と面白さを知って、もっと勉強したいと思ったのである。その場合も、私が戦時中の三歳のとき両親を失い、子どものときから働き、大学や大学院のときも自分で働き自分のお金で学んだ社会体験があったからこそ、現実の経済の動きと自分の生活を考えるなかで経済学への勉学意欲がわいたのである。

それゆえ、私は日本のような経済的に成熟した社会では一定の社会体験をして自分の目的と適性を見つけて大学に入ることが正常な大学教育であり、国民が学びたいと思ったとき、いつでもどこでも学べるように条件整備をすることが大切になっていると思う。現にスウェーデンでは大学生の六五％が二十五歳以上の人たちである。そして、いろいろな社会体験をもち、広い年齢層の人たちが学んでいるので議論は活発である。子どものいる学生のために大学に保育所も設置されている。

私は二十歳前後の同年齢層で固まり、社会体験も少なく、議論もあまり弾まない多くの日本の大学を見るにつけ、大学はもっと複線型に変化していいと思っている。

私たちの高知短期大学は昼間働いて夜学ぶ社会人のための男女共学・二年制の県立大学であり、大学のあり方の最先端を行っていると思う。それは昼間働くという社会体験をし、一定の目標をもって入学するからである。

私たちの大学を少し紹介する。社会科学中心であるが、経済系・法律系のほかに、本年度より環境論・平和学などの総合社会系の科目を充実した。また、短期大学卒業生以上の人のため、専攻科を設置した。今年本科生に百四十九人、専攻科に二十二人（うち四年制大学卒業生九人）が入学した。

入試制度も一般入試のほか、二十二歳以上の社会人のための社会人特別入試（面接中心）などを実施し、多様化している。学生は十八歳から六十七歳まで年齢層も広く、職業もさまざまである。今年も夫婦や親子で入学したり、子どもが二回生、親が一回生という人もいる。働きながら一定の目的をもって入学してくるので勉学態度も熱心である。

そして、私たちは高知短期大学が社会人の高等教育のために四年制の大学になることを県にお願いしている。この上に社会人のための大学院ができれば最高であり、これまで以上に全国に世界に発信できるし、高知県の活性化に大いに役立つであろう。

まさに、二十一世紀は社会人（大人）のための大学・大学院教育の時代、高知県民自らが生き生きと輝く時代であり、社会人（大人）の高等教育を担う私たちの出番である。

（ふくだよしお・高知短期大学学長代理）

インドネシアとスラバヤ

北田多喜

国家の原則の一つに「多様性の中の統一」を掲げるインドネシアは一万三千の島、二百五十以上の民族・言語があり、人口が二億人を超える大国です。当然、宗教も約八七％がイスラム教ですが、その他にキリスト教、仏教、ヒンズー教信者がおり、また習慣、文化もそれぞれ民族によって違います。

姉妹都市スラバヤ市のイスラム教徒の少女たち

私が日本の大学を卒業後、日本語教師として就職した中部ジャワの大学はまさに小さなインドネシアでした。その総合大学は私立だったのでジャワ以外に、スマトラ、チモール、カリマンタンなどインドネシア全土からの学生が学んでおり、附属高校の生徒も半分は自宅からではなく下宿先から通学していました。

昔、都のあった中部ジャワは日本の京都のような所で、大きな音、声をたてない、本音を言わない雰囲気・文化が残っています。中部ジャワ人に関して、こんな笑い話があります。曰く、「ジャワ人の家が火事になればまず全焼してしまう。と言うのもジャワ人は助けを呼ぶのにも丁寧に優雅な声でトュルバカール（火事なあんでえすう）と叫ぶ？からだ。叫んでいる間に手遅れになる」。

そしてその中部ジャワ人によるスラバヤ人評とは、話し方も荒く、気も荒い、というものです。事実スラバヤ人同士の会話はまるで喧嘩で、中部ジャワ基準で言えばタブーとされる音量と語気なのです。

インドネシア人同士の意志疎通のために共通語としてのインドネシア語があります。ジャカルタではインドネシア語世代も生まれはじめていますが、日常生活ではそれぞれの母語、例えばジャワ語、バリ語などそれぞれインドネシア語とは日本語とハングルくらい違う言語を話します。

また同じジャワ島の中でも、大まかにスンダ語を話す西部のスンダ人、ジャワ語を話す中部・東部のジャワ人と単純ではないのですが、同じジャワ人でもずいぶん違うので驚きました。そんなことからなんとなくスラバヤ苦手意識を持ってしまいましたが、四年後深い関わりを持つことになったのです。

私がスラバヤでの協議訪問団とご一緒した時のこと。私はジャカルタにいる友人に電話し、不安を訴えました。しかし友人は「スラバヤ人は大都市には珍しく基本的に善人が多い。表裏がないし、心配はない。確かに話す様子は怒っているみたいだけどね」と励ましてくれ、その後ずいぶん気が楽になったのを覚えています。

スラバヤ市内に戦時中、近代的武器でなく竹槍で勇敢に闘ったことを記念した竹槍モニュメントがありますが、最近はこれがスラバヤ人を象徴しているように思います。つまり英雄の街らしく勇猛果敢であるだけでなく、竹を割ったように気持ちのいい人々という印象です。一緒に仕事をする度この印象を強くしています。

先日スラバヤ市長であるスナルト氏が来高された時、こんな話をして下さいました。「以前アメリカの学生がスラバヤにホームステイに来た。着いたばかりの頃、彼らは非常に傲慢で鼻持ちならなかったが、受入先の家庭でよくしてもらい、帰る頃には帰りたくないと泣いて泣いて大変だったんだよ」と。インドネシア人は一般に本当に客を厚くもてなします。時にそれがかえって辛いと思えるほどです。インドネシアにプライバシーはないが孤独もないという人もいます。情の厚いスラバヤ人ならきっとアメリカから来た学生の心にも熱いものが届いたことでしょう。

姉妹都市である高知とスラバヤが末永く共に繁栄されることを祈ってやみません。

（きただたき・インドネシア語通訳）

高知市民ミュージカル脚本賞

審査を終えて

窪内隆起

市民参加のミュージカルとしては、これまでに一九八九年の「ミュージカル・RYOMA」を皮切りに、九二年の「ミュージカル津野山物語」、九六年には『ミュージカル「絵金」』が制作上演された。それぞれ大変な好評を呼び、ミュージカル愛好者の層を拡げるのに貢献している。

今回はそれに続く第四作ということになるが、脚本段階から広く市民に参加してもらおうという主旨で、高知市文化振興事業団が県内外に呼びかけ、公募した。

寄せられた脚本は二十二作で、この審査には、ミュージカル演出家として中央で活躍している吉川徹氏、県内からはくにみつゆかりさん、寺澤悦治氏、それに私を加えた四人が当たった。

応募者二十二名の内訳を見ると、女性十二名、男性十名で、女性が上回っている。年齢は二十三歳から八十三歳までと幅が広く、年齢を問わず関心の高いことを示している。このうち県外からの応募は、東京、愛知、福井、大阪、兵庫、広島からの八名であった。

作品の条件としては、何らかの形で高知に関係していること、というだけで、特にテーマは限定されていなかったため、応募作の内容は多岐にわたっていた。実在の歴史上の人物、実際の出来事、民話、伝説、伝説上の動物、実際の動物、あるいは東南アジア諸国の民俗や風俗に取材したものなど、作者の日頃の関心事や研究テーマを主題にしたであろうと思われるものが多かった。

全く初めて書いたと推察される作品や、何らかの形でミュージカルに触れたことがありそうだという作品など、さまざまであった。ほとんどがアマチュアの作品なので、様式や構成、表現の方法には相当な差異があった。しかしいずれも、真剣に資料を探索し、それを取り入れた努力のあとがうかがえ、初めて知ることも多くて、よい勉強になった。

各選考委員の一致した基準は、人間にしても動物にしても、それをどう見詰めているのか、つまり生命をどう見詰めているのか。生命というかけがいのないものを通して、人間と動物がどうかかわり合っているのか。自然環境と、人間や動物の生命とのつながりをどう見ているのか、など、「いのち」「生きる」ということを、どうとらえているのか、ということであった。

勿論、ミュージカルである以上、それをストーリーとしてテンポよく、スムーズに表現できているか。大きな比重を持つ歌詞が、全体の中でよく役割を果たしているか、ということを踏まえて選考した。

全作品について慎重な討議、審査を重ねた結果、「ミュージカル『光の中で…』」（池本美知作）を最優秀賞に、「ニホンカワウソたちの森」（バローチみき作）を佳作として選出した。

「ミュージカル『光の中で…』」は、四万十川へ合宿に来た都会の高校写真部員たちと、伝説の動物エンコウ（猿猴）たちとの交流を主にして、ストーリーを幻想的に展開させている。また、知的障害をもつ青年の、こどものような純真なひたむきさが、やわらかく迫ってくる。一方では、坂本龍馬の銅像をユーモラスに、しかし重厚に擬人化してからませている。そういう異次元の人物や動物のそれぞれの交流が、無理のない運びで流れ、美しい歌詞がストーリーを更に盛り上げている。

全編を通じて、人間の持つ心の温かさを大切にし、自然や動物と溶け合って共生するという願いがこめられている。こういうものは今や地方でしか出来ないのではないか、市民ミュージカルという形でしか表現出来ないのではないか、という時代的なテーマを、親しみのもてる様式でよく表現している。このような点が高く評価され、全員一致しての最優秀賞となった。

「ニホンカワウソたちの森」は、絶滅が心配されるニホンカワウソと、

市民参加の創作ミュージカル ― 多くの人的交流を生み、文化のすそ野を広げる（ミュージカル「絵金」より）

県の鳥ヤイロチョウという、よく知られた動物と鳥が主人公となっている。それが仲良くじゃれ合ったり、時には口げんかをしながら、ストーリーの進行役をつとめる。それに地元のUターン青年や外国人観光客がからんで、にぎやかに進んでゆく。高知城や自由民権記念館や、ジョン万次郎の話まで出て、幅の広い物語で運ばれてゆく。

そのような展開の中で、終始基調となっているのは、「森は川を育て、川は海を太らす」という自然保護の願いで、そのために人間は何をするべきかという問いかけで貫かれている。

これも市民ミュージカルならではの、共感のもてる作品だが、欲を言えばいま少し深く突っ込んだ部分が欲しいということで、惜しくも佳作となった。

応募作の中には、「原石の良さ」を持ち、次回には大いに期待できる作品も幾つかあったことをつけ加えておきたい。

（くぼうちたかおき・㈱テレビ高知常勤監査役）

最優秀賞を受賞した
池本美知さん

「なんと気持ちの良い、心安らぐ場所の多いことか」……私がふるさと高知の魅力を実感し始めたのは、恥ずかしながらここ数年のことです。しかし、これほど豊かな自然に恵まれ、その雄大さ、不思議さ、自由さに親しんでいるはずの私たちの心は、果たして気持ちよく、自由に息をしているでしょうか？……そんな疑問への答えを探している時、ミュージカル脚本の募集を知りました。本格的にワープロに向かってからの約二週間は、連日の徹夜作業にもかかわらず、夢のようにワクワクして充実した毎日でした。しかし、それが本当に舞台にのることになろうとは！

これから、この本を通してたくさんの人たちが出会い、ふれあい、作品として素敵に彩られていくことでしょう。それがどんな光を放つのか、とても楽しみにしています。

創作演劇「信親」顚末記（上）

「長宗我部」裏話

森田悦男

高知市文化祭五十周年の記念舞台に何をのせるか、について三年ほど前から文化祭執行委員会で論議してきた。テーマは郷土もので、演劇を主体とし、ジャンルを問わず参加団体の総力をあげて取り組む内容と規模であるもの、高知市文化推進協議会も若手を中心に全面的に制作協力する、との大枠は決まっていた。

しかし、記念の舞台に対しては各人各様の思い入れがあり、なかなかこれらの要件を満たした案は浮かばなかった。そこで、参加団体からテーマを募集したところ、土佐の戦国大名、長宗我部氏が選ばれた。

テーマが決まってから脚本が仕上がるまでにもさまざまな紆余曲折、悪戦苦闘があったが、制作のねらいや苦労話は次号の演出の吉本智賀子さんに譲るとして、私は長宗我部氏のことや元親公の戦跡を訪ねた行脚の数々を語ってみたい。

●

戦乱の世に、土佐の豪族の一つとして勝ち抜き、生き残るために、長宗我部一族の成し遂げたものは何であったのか、一時は四国を制覇し、跡形もなく消滅した一族。

いま、私たちの体内に流れる血潮には、多かれ少なかれ、長宗我部の血が交じっていると言われている。土佐人の土佐人としての心のルーツを探ることこそ、文化祭五十周年記念行事に相応しいことと思う。また、元親公没後四百年（一五九九年五月十九日）の前年にもあたり、この事業に取りかかった。

私が最初に始めたのは、彼の進撃した足跡をたどることにより、長宗我部一族が何故に四国制覇を成し遂げたのか、名誉欲かそれとも争いのない世界をつくるためなのか、いまだに分からない疑問の解決と、滅び去った勇者、故郷の平和と安らぎを念じながら戦死した家臣たちの鎮魂を祈ることであった。

まずは朝倉城址から。朝倉駅の方から登り始めたが、道らしい道はなく、ここが本当に城跡かと思いながら案内人に説明されても何が何だか分からないまま頂上へ、そこから見る高知市は鏡川がキラキラと光って綺麗であった。私にはまだその時は実感が湧かず、とにかくここに城があったことが分かったにすぎなかった。

芸西村の琴ケ浜にこんな昔話がある。夏になると近所の子供たちが集まって肝だめしをやるのだが、浜の中程に墓場がありそこに景品となる菓子類を置いている。途中には西瓜をくりぬいて中にローソクが立って、いかにもこわげな話をする。

その中に「夜行さん」の話があった。『月見草が咲き乱れている夜半に首のない馬に乗った白骨化した国虎が甲冑に身を固め、東から西へ「冥途は何処じゃ、冥途は何処じゃ」と走って来る』。そんな話の後で墓場の景品を取りに行くのだ。子供心にもおそろしかった。

土佐統一を成し遂げた元親公は次に阿波攻めを行うが、日和佐から小松島までのタクシーの中で運転手さんからこんな話を聞いた。阿南富岡城の殿様は名君と言われていたが酒が好きで、ある時、長宗我部の家臣にだまされてたらふく酒を飲まされ寺の縁側で切り殺されたとか。その血潮が天井まで散っていた。それ以来この地方では、この寺を断酒の寺と言うようになった。私も大酒飲みだったので身につまされたことであった。

四国霊場六十六番札所雲辺寺にもこんな逸話が残されていた。

侵攻してきた元親公に住職が、「おぬしはせいぜい土佐一国の主だ。それが四国の主となろうとは茶釜の蓋で水桶の蓋をするようなもので、しょせんその器ではない。一刻も早く土佐に帰り、土佐一国の領民を愛撫した方がよかろう」と鋭く戒めた

戸次川での戦いに挑む青年武将・信親（写真中央）。ドラマはいよいよクライマックスへ（上）
迫真の演技が観客を魅了した（左）

が、元親は「仏法のことは僧に聞け。兵法は武士にこそ」と言い残し讃岐へと侵攻していったのである。

私が雲辺寺に登った時は春三月というのに雪が残る寒い朝であった。香川県側から山頂までロープウェーで行ったが、山頂には今に至っても長宗我部を嫌ってか毘沙門天が建立されている。実はこのお堂の堂守さんは土佐の朝倉の人ということであったが、ここから見る讃岐平野は雄大で、はるか彼方に瀬戸内の海が一望でき、私が元親公であってもこの讃岐平野は欲しいと思った。

このような旅を一年余りもしている内に、これをドラマ化するには、雄大すぎ焦点がボケてくる、侵攻劇の中で常に底辺にいて共に戦った一領具足を題材としてはどうか、と思うようになった。彼らは兵農分離する前の時代の勇猛にして、命知らずの武士であり、戦意旺盛にして勇猛果敢だった。それは、戦勝のたびに所領の加増と地位の向上が約束されていたからである。

後に豊臣秀吉より土佐一国に封じ込められ、やがて、山内の時代となり、ある者は農民に、あるいは庄屋の地位に甘んじ、郷士となって二百余年を生き長らえ、この一領具足の怨念が明治維新の原動力となり、坂本龍馬や中岡慎太郎を生むことになるのだが…。

私が長宗我部の旅を続ける中で思い当たったことは、土佐人の中には今だに長宗我部が生きている、酒の席でも「儂の祖先は一領具足じゃった」と言う。決して山内侍とは言わない、こんな所にも土佐の地侍としての魂が生き続けているのだ。

●

構想があまりまとまらないので今は故人となった劇団ゆまにての武市哲夫さんに相談をしに行ったときのことだが「あんまり真面目に考えよったらろくなものができんき、山内の殿様は一豊ではのうて山内次豊とでもして書いてみようか」と気軽に引き受けてくれたのだが、この年八月武市さんは帰らぬ人となり、この仕事はお弟子さんの吉本智賀子さんに託すことになった。

（もりたえつお・高知市文化推進協議会代表理事）

21世紀の風の街道

西山彰一

一九九七年二月の寒い夜、いつものリハーサルスタジオに音楽仲間が集まった。メンバーの一人、高橋次郎さんの「石の風ぐるまを見たことがあるかい？」という一言から、私にとって忘れることのできない風の旅人達の出会いを知ったのである。音楽家であり生態系科学者である高橋次郎さん、彫刻家の門脇おさむさん、そして窪川町生まれの平山裕子さんとにぎやかな友人の輪によって語られる風の街道の話をご紹介したい。

人は生活体験の中でたくさんの知識を身につけ大人として成長する。その反面、既成概念で物事を判断し、見逃してしまうことも多いように思う。「二トンもある石の風ぐるまが稲穂が揺れるぐらいの風の力で回る」という話はまともに聞いてもらえないらしい。

実際風で回っているのを見ても、多くの人は、「電気仕掛けで回っている」とか「太陽電池を使っている」とかつぶやきながら、常識でその作品を見ているようだ。自然の力が常識を覆す芸術に魅せられてしまった私は、一日でも早くその作品を見たくてたまらない気持ちに駆られるのであった。

石の風ぐるまの作者である、門脇おさむさんは、高知市五台山の麓の美しい田園風景の広がる一角にアトリエをかまえている。門脇さんは、石の風ぐるまや親子のとんぼなど風や水の力で動く作品を精力的に製作している。

私の勝手な思いこみで、門脇さんには失礼になるかも知れないが、レオナルド・ダ・ヴィンチが高知に住んでいるという思いが日増しに深くなっている。彼の作った石の風ぐるまは、岡山県有漢町、熊本県鹿本町、愛媛県八幡浜市、高知県大正町ほか、全国数カ所に設置され、心温まる作品は大人、子供を問わずアートを親しむ人の輪を広げている。

高知自動車道より、瀬戸大橋を渡り中国横断自動車道で米子方面に向かい約二時間半で石の風ぐるま公園、有漢町常山公園に到着する。有漢町は人口三千人で、この土地においても高速道路の開通によって過疎の深刻化が懸念されていた時期があったそうである。地域おこし活動に火をともし、町を元気づけている人々の中に窪川町出身の平山裕子さんが活躍している。

直径２メートル以上もある大きな風ぐるまの下でくつろぐ人たち

平山さんと活動を共にした人々の情熱によって有漢町の石の風ぐるま公園が完成し、一九九七年度の建設省の「手作りふるさと大賞」を受賞した。平山さんの運動がきっかけとなって生まれた「風ぐるまサミット」は、人と文化の交流によって生まれるこれからのまちづくりに熱い視線が注がれている。土佐のはちきん文化は岡山の女性達にも支えられ、今、英国にまで飛び火しそうな勢いである。

月の光を受けて美しいシルエットを見せる石の風ぐるま

「素敵な町はどんな雰囲気をもっているのだろうか？」。そんな私の疑問に友人の建築家は、「素敵な町はくつろいでいる人の姿をみればわかる！」と答えてくれたことを思い出す。戦後五十年の節目をすぎて、社会の仕組みについて様々な問題が投げかけられている。「私たちの求めた豊かな社会像は今の姿なのであろうか？」「先端技術を駆使し経済性を追求した結果、日本の田舎の姿はどのようにかわったのだろう？」。

今から三十年ほど前の田舎には四季折々の草花や虫達が目を楽しませてくれた。小川にはめだかや鮒が群れをなしているのを楽しみながら川遊びをした頃を思い出す。コンクリートでがっしり固められ「絶対に壊れないぞ」と言わんばかりにそそり立っている三面張りの堤防や土が無くなってしまった広場は小動物の過疎化を進めているように思う。自然界の生物達の「助けてくれ、もういいかげんにしてくれ！」という悲鳴が聞こえてきそうである。心の豊かさが求められることは自然界の虫達の叫びと共通するものがあるのかも知れない。

二十世紀の科学技術の進歩によって、人類が地上に誕生して以来最も恵まれた環境の中で私たちは生活しているように思う。そんな豊かな環境であるのになぜ人々の心の病が顕在化したような社会問題が起きるのであろうか。「衣食足りて礼節を知る」という論語の言葉を思い出す。礼節を知った時代が過ぎて更に有り余った恩恵があると堕落への道をひたすら歩むのが人間の宿命なのだろうか？

今から三十数年前に、一世を風靡したアメリカのフォークシンガー、ボブ・ディランの歌「風に吹かれて」という曲に、「私の友よ探し求めた答えは風が答えてくれるだろう」という一節がある。今でも色あせずにその歌が新鮮に聞こえるのは四十を過ぎた青年のノスタルジーだろうか。

岡山県有漢町で開かれた「風ぐるまサミット」

石の風ぐるまがゆったりと動く様はまさに忘れかけた私たちの心のふるさとに優しく招き入れてくれる。その優しさは、乳母車に乗った赤ちゃんがくるくる回る風車をさわろうと一生懸命手を伸ばしている光景に似ている。私たちの夢を乗せて、太平洋から日本海に向かう道は二十一世紀の風の街道となって今日も人の行き来を見守っているのである。

（にしやましょういち・宇治電化学工業代表取締役専務）

動物たちの子育て ⑤

中西安男

《タヌキの子育て》

タヌキ。イヌ科に分類されるこの動物は、私たちの身近な動物として親しまれている。高知県にも広く分布し、里山から山奥までの様々な環境に適応し、驚くことに自然が消滅した市街地にも少数ながらたくましく生活している。

時折、住宅の庭に現れたタヌキにエサを与えていることが話題になり、微笑ましい野生動物と人間の交流といったような感じで報道されたりしているが、野生動物にエサを与えることは避けていただきたい行為である。エサを与えるために野生が野生でなくなり、いろいろな問題が生じたりするためである。個体数が異常に増えたり、病気の大発生が起こったりする。

最近本州で、市街地周辺のタヌキたちに疥癬（かいせん）が流行し、死亡する事例が多くなっているのも、よけいな部分で人間との接点が多くなったことに原因があるのかも知れないのである。

さて、この連載に登場した哺乳類動物の子育ては、父親はいても父親が人間のように子育てに大きく関与することはなく、母親だけで子育てをする動物たちだった。今回のタヌキは哺乳類界では少数と言える父親参加型の子育てをする動物である。

タヌキは動物園では当たり前のようにどこでも飼育されている動物であるが、意外と繁殖となると難しい動物の部類に入る。飼育自体はしごく簡単であるのだが、繁殖行動は非常にデリケートにできているようだ。アニマルランドの前身である旧施設ではこの難しいタヌキの繁殖に三回も成功している。その三度目を経験したのだが、その時のタヌキの子育ては今でも私の脳裏から離れない。

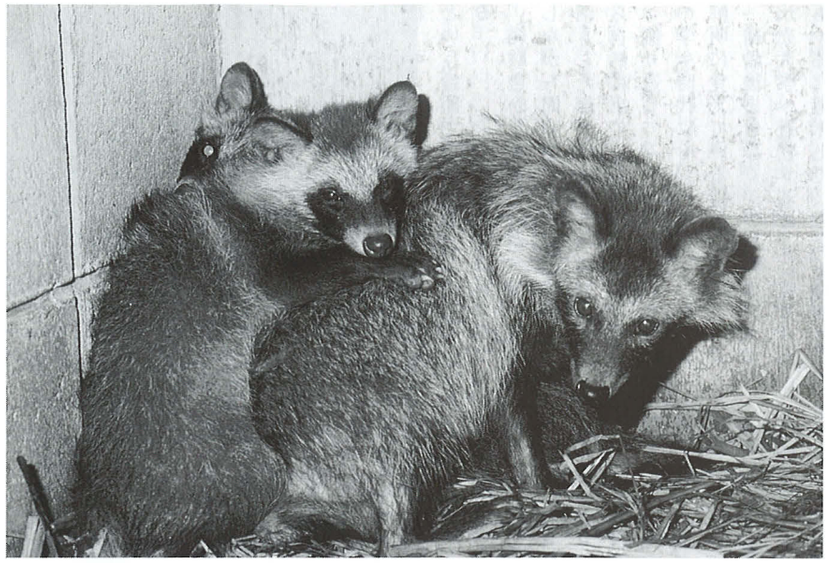
ペアで飼育していたタヌキのメスの腹部が大きくなり妊娠していることが分かった。出産のために巣穴の奥が外から見えないように小さな出入り口だけを残し、厳重にメスのプライバシーを保護するようにした。そして、やわらかい春の風が吹くある日、無事に五頭の赤ちゃんが誕生した。目も開いていない本当に小さな命だった。その小さな命が育つために、私たちができることは、何もしないことであった。

エサを与えたり掃除をする時以外は、そっとしておくことが一番であった。しかし、数日後には五頭だった赤ちゃんは二頭になっていた。他の赤ちゃんは何が原因か分からないが死んでしまったようだ。この二頭の赤ちゃんも心配したが、その後は順調に成長していった。

ところで、この出産で父親の行動が大変興味深いものだった。出産数日前になるメスは大変に用心深くなり、オスが巣穴の中に入ろうとするとそれを拒否した。オスはその剣幕にたじろぎ巣穴の周りをウロウロするばかりである。出産してからも一週間ほどはやはり中に入ることを拒否されていた。しかし、その間メスのためにエサをせっせと巣穴の入り口に運んでいたのである。子どもがある程度成長してから巣穴に入るのを許可されるようになり、オス親が甲斐甲斐しく子どもの世話をするのが観察された。

生後15日の子どもと母親

これはまさしく父親の役割である。タヌキの夫婦の絆はかなり強く、オスはメスや子どもたちのために人間くさいまでの行動をみせるのである。



生後２カ月、タヌキらしくなった

こうした行動はイヌ科の動物の仲間では普通の行動であり、キツネなども同じようにオスが人間のような父親的役割で子育てに参加する。

群れで生活している動物は多くいるが、群れ自体は種によって様々なタイプがあるものの、オス親がはっきりと分かる場合でもそのオスは父親としての行動よりも、群れの重要な存在のオスとしての行動しかしない。それは周りのメスたちもそう認識しているようである。そのため、群れの中に父親はいるのだがやはり子育ては母親だけの単独行動であると言える。もちろん、細かいオスの行動を見れば、子守をしているような行動は観察されるが、それは人間のような関係の父親的役割としての行動ではなく、あくまでも群れを率いるオスとしての行動である。

その後のタヌキ夫婦の子育ては順調で、その愛らしい子育ての光景に我々も満足であった。ところが、子どもたちが生後二カ月ほどになったある日、オス親の体調が崩れた。彼の症状は重く、我々の懸命の治療も彼の命を繋ぎとめることはできなかった。

残された母子が心配になった。あれほど子育てに重要な役割をもっていたオス親の死は、残された母子にはかなりのショックであるはずだ。予想通り、その日から突然姿を消した父親を母子が切ない声で「キューン、キューン」と呼ぶのである。その呼び声は一週間もの間つづいた。我々は母親が育児を放棄するのではないかとの心配があったが、悲しみに打ちひしがれても母親は子育てを放棄するようなことはしなかった。

これまでに経験したいろいろな動物たちの子育ての中でも、特に印象に残っているタヌキたちの悲しい事件であった。今でもその母子が父親を呼ぶ悲しみに満ちた泣き声が、私の脳裏にはっきりと記憶されている。

（なかにしやすお・わんぱーく こうち・アニマルランド）

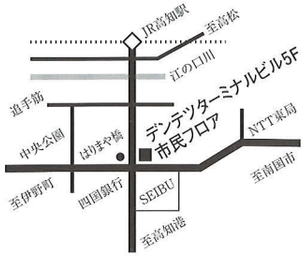
市民フロア

グループ展・会議に最適！

●広さ・内装　約96㎡・壁面布クロス張り
スポットライト完備

●使用料

展示	1日（9時～18時）	11,000円
	1週間	70,000円
会議	9時～12時	4,000円
	13時～17時	5,000円
	17時～21時	5,000円
※休館日	毎週水曜日（搬入・搬出日）年末年始	



◆お問い合わせ
㈶高知市文化振興事業団
☎73－4365

活きのいい授業

佐藤公子

「課外授業・ようこそ先輩」というテレビ番組がある。各分野で活躍されている人が、母校の小学校を訪れ、ちょっとテレながら授業をするという番組で、毎回楽しみにしている。

経験豊かな先輩の話を、少し緊張しながら聞いている小学生達の活き活きした顔がいいし、子供達の口から自然に出てくる質問がいい。

振り返ってみると、出来の悪い私の学生時代にも、一度だけ、今でも鮮明に覚えている授業がある。

結婚後まもなく、夫が南フロリダ州立大学へ赴任することになり、私も一緒に渡米した。友人も親類もいない、全く見知らぬ土地で、朝、主人を研究室へ送り出してしまうと、何もすることがなく、大学のartのクラスに通ってみることにした。

そのクラスでは、一学期中に五つのテーマが与えられた。全てのテーマで授業を楽しんだが、その中でも特に印象に残ったのがegg drop project（エッグ　ドロップ　プロジェクト）という、卵の容器を作る課題だった。卵を入れて、教室のある二階のバルコニーから地面に落としても壊れないような容器を作るのである。作品を作るのに与えられた時間は二週間で、三週目に各自が作品を持ち寄り、一人ずつ二階のバルコニーから落とすことになった。

ある学生は、どんぐりの木の細い枝でトリの巣を作り、まん中にコケで巻いた卵を押し込んだもの。また、トリ小屋に張るネットをまるめて、まん中にニワトリの羽でくるんだ卵をセットしたもの、卵に糸で十五個の風船を結びつけたもの、などなどである。

ひとつずつ作品がバルコニーから落とされるたびに、皆で落下した場所に駆け寄り、つぶれてる!!、セーフだった!!と歓声が上がる。スーパーマーケットで買ってきた、一羽まるごとのチキンの内臓を取り出し、そのお腹の中に卵を埋めこんだものまで落とされる始末で、卵は壊れたが、そのアイデアはみんなに大いに受けた。

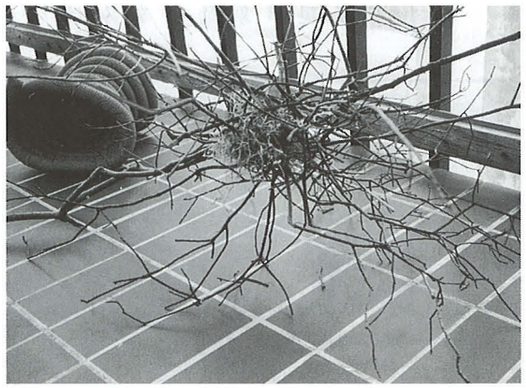
いかにもアメリカらしい明るい雰囲気、ユニークな発想、先生と学生が互いにニックネームで呼び合い、ディスカッションしながら進められていくクラス。日本の、教科書を使い、一方通行のマンネリ授業しか知らない私にとっては、新鮮な驚きだった。こんな楽しい授業では、英語のよく出来ない私でも、授業時間の長さを感じたことはなかった。

いま、日本の大学では教育システムの見直しが行われている。でも、その成果はどうかというと、単に建物が新しくなったとか、授業の中身はそのままで、学部や学科の名称が変わっただけ。肝心の大学の先生の教育・研究に対する質や情熱とかは、あまり問題にされていないらしい。

活きのいい授業とは、先生の工夫と努力と情熱で、ほんとうは長い九十分の講義を、長いと感じさせない、先生も学生も夢中になれる授業だと思う。

ともあれ、番組の中で、きらきら輝いている小学生達と一緒になって、エキスパートの課外授業を楽しませてもらっている。

（さとうきみこ・ステンドグラス工房主宰）



楽しい雰囲気で授業が進む（上）
卵をコケで巻き、小枝をクッションにした作品（下）

民俗雑記帖2　暴力論

梅野光興

「キレる」子供たちや、中学生によるとされる残酷な殺人が話題になっている。一体、現代社会はどうなってしまったのだろうか、とつい考えてしまう。だが、昔に比べて今の子供は恐い、と決めつけるのは考えものだ。

『江戸の少年』（氏家幹人著・平凡社）という本には、江戸時代の若者が行った残酷な事件が紹介されている。若者による暴力的な事件はいつの時代にもあり、その話題をすることは人々にとってある種の欲求のはけ口になってきたと考えるべきだろう。だとすれば、人間は本来暴力的な衝動をもった存在であり、若者は、みなぎる体力とあわさって、その力を発現しやすい存在であると考える視点も必要になる。

かつての社会では、そんな若者の力を、村落のためにうまく利用していた。宿毛市に残る若者組の泊まり屋は、十五歳になった若者が集まり寝泊まりする場所だった。やぐらのような形をしているのは、火事などの見張りをしたり、何か事件が起こったとき迅速に行動できるためであったと言われている。いわば、若者組は消防士や警察の役目を果たしていたのである。

また、祭りの日に若者のパワーは欠かせなかった。去る四月二十九日に、東洋町白浜の五社神社の春祭りを見学させてもらった。この祭りは別名けんか祭りとも言い、祭りの最後に神社に戻ろうとする神輿（みこし）を、青年が引くだんじりがそうはさせじと争うのがクライマックスである。

かつては白浜の青年が東西に分かれて二台のだんじりを引いていた。祭りの前からこの二組は緊張関係になり、何かにつけにらみあう状態になったともいう。むろん、祭りがすめばこのような対立も自然に消えていったのだろうが、同様の血気盛んな祭りの雰囲気は海岸部の町村ではよく見られたものらしい。

歴民館の史跡巡りでお邪魔した窪川町興津の古式神事においても、若者のかつぐ宮船が壮年のかつぐ神輿を追い回し、しまいには神輿に激突していくという荒々しい場面があった。そんな祭りにはまたけが人も珍しくなかったのである。

神輿が荒れるのは神の意志であった。神輿やだんじりは、ふだん評判の悪い人の屋敷に暴れこみ、壁や塀を壊すこともあった。いわば集団による制裁である。何と野蛮な、と思うが、祭りは人々の暴力衝動の解放装置でもあった。儀礼的なけんかを行うことで、怒りや破壊願望といった人々の暗い欲動をあらかじめ発散させる機能が祭りにあったのである。

昭和三年の宿毛では、選挙に負けた腹いせに、相手方の家に樽みこしを担いで突っ込んだという事件があった（橋田庫欣著『宿毛風雲録』）。悪いことには違いないが、町の人の多くは「青年にはこれくらい馬力があってもよい」と、突撃した青年たちに共感したと言う。時と場合によって、集団の暴力が認められることもあった。

だが管理社会において、このようなものはあまり望ましいものではない。

江戸時代からさまざまな禁制があったし、近代社会では力の発散はもっぱら運動会のような形にすりかえられてきた。確かに運動会でも力の発現や、儀礼的な競争はある。しかし、祭りのもつ暗い衝動の解放は、「健全な精神は健全な肉体に宿る」スポーツの中では解消されない。それどころか、枠にはまった運動の強制は新しい抑圧を生むことさえある。現代社会は抑圧し規制することは得意だが、人間の暗い面を理解して、解放することはあまりうまいとは思えない。

私は集団による暴力が良いとは思わないが、単に抑圧すればすむものでもないだろう。まったく人間とは困った代物だが、かつての社会の方が、その人間の困った所をよく知っていた、ということだろうか。

（うめのみつおき・高知県立歴史民俗資料館主任学芸員）

東洋町白浜五社神社の春祭り。
神輿とだんじりの争い

第14回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

沈下橋　岡田文夫

夏の早朝はすがすがしい。ひんやりとした空気には霊気さえ漂い、せせらぎの水も、この頃、とりわけ清冽に感じられる。

昔、七夕の早朝、川から汲んできた水を、正月の水同様「若水」と呼び、大切にしていたというのもうなずける。

そもそも、一年の長さは天（自然）が決めたものであるが、それをどこで区切るかは人間の勝手である。主に北半球で発展した文明では、寒くて日の短い冬至や、春の息吹を感じる春分を、一年の始まりとする傾向があったようである。

冬至を年の始まりとすると、夏至や七夕はちょうどその中間点にあたり、この頃、半年の疲れをとる骨休みや、その間に犯した罪穢れを清める行事が、民族や宗教を超えて行われている。面白いことに、暑い季節であるためか、それらは不思議と水にかかわっている。

そもそも、「タナバタ」は、棚機つ女に由来し、水辺につくった棚で機を織りながら水神の訪れを待つ乙女の伝説にその源を発している、と言われている。

また、中国華南には、七月七日の早朝、川で汲んだ水を家に貯める習慣がある。これを仙水とか七月七水と呼び、置いても変質しないで、疾病を治す力があると信じられている（吉成直樹著『俗信のコスモロジー』より）。

若水

風俗歳時記

県内にも、七夕飾りを川に流す時、里芋の葉に包んだ水で顔を洗うときれいになるし、イボにつけると治る、という言い伝えがある。

吉成氏は、これら俗信の背後に、夏を正月と並ぶもう一つの若返りの時とする、民族を超えた共通の思想が存在すると考えている。

つまり、夏の早朝の水は、元旦の水と同じく、〝若水〟で、再生、脱皮、といったことへの願いが込められているのである。

ところで〝若水の季節〟の選挙、腐りきった政治家や〝高級〟官僚に少しは〝冷水〟を浴びせ、〝脱皮〟のきっかけを与えることができるであろうか？

（路）

第四小学校正門前に「婦人参政権発祥之地」の碑がある。明治13年、上町で女性に参政権が与えられたことを記念して平成2年に建てられたものである。こうした先駆的な実績のある本県においても、昨今は投票率が低落傾向にある。碑の前にいると「せっかくの権利を無駄にしおって」という嘆きの声が聞こえてきそうである。今月12日投票の参院選では公選法の改正で、投票時間が2時間延長される。法の趣旨が生かされることを期待したい。

風伯

せっかく障害者に……

「せっかく障害者になったんだから……」という、A女の言葉に、と胸を衝かれた。

〈あすなろ会〉の例会での発言である。

同会は、脳卒中障害者のつどい。塩田町の〈高知市役所健康づくり課〉で、毎月二回ひらかれる。左片マヒの家人が、東部健康福祉センターでお世話になっているご縁で、今年の二月に参加させて頂いた。

同会には、挫折と絶望のどん底から立ち上がって、「再び人間らしく生きる」ために、不断の努力を続けている方々が多い。

たとえば、世話役のN氏は、同会のほかにも、〈竜馬スイマーズ〉（障害者水泳クラブ）、朗読会（視覚障害者のための音訳奉仕をめざして）など、六つの会で活躍している。副委員長のM女は、第三十三回障害者スポーツ大会ふれ愛ピック大阪国体に出場し、クロールと背泳の二種目で、金メダルを受賞。

冒頭に挙げたAさんは、右片マヒのため、左手で文字を書く練習から始めた。障害者歴十余年。チャレンジ精神の権化のような方である。

「せっかく障害者になったんだから、障害者ならではの愉しみや、歓びを味わい、障害者の心を健常者に伝えてゆきたい」と言う。五月中旬に、ヨンデンプラザで開催された、視覚障害者のための〈触れる陶芸展〉で、Aさんの作品を見た。

東部健康福祉センターの陶芸教室で基礎を学んだ、と聞く。趣向を凝らした、なかなかの逸品であった。

（念）

賛助会員募集中

会費：年額　2,000円

特典：①　機関誌「文化高知」を年６回お手元にお届けします。

②　事業団発行の出版物の10％割引（一部例外あり・直接事業団で購入する場合に限る）

③　主催事業や刊行物の案内（マスコミ利用の場合あり）

〔※お申し込みの日から１年間有効〕

お申し込み：①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…

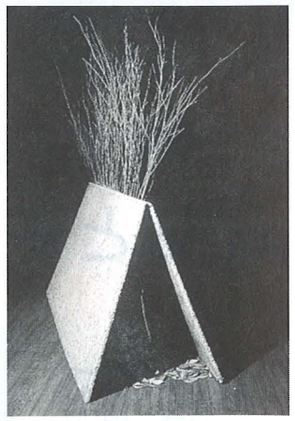
いずれの方法でもけっこうです。

第17回市民フロア企画展

宮田福美展

―森ノキオク―

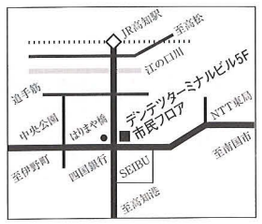
和紙・小枝・木の葉etc. 自然の恵みを使った立体作品20点を展示します。



1998/7/10(金)～7/20(月)

10：00A.M.～6：00P.M.会期中無休

はりまや橋・デンテツターミナルビル５階



ドイツ・ウルム市からの日本縦断ミニコンサート

ウルマー・カンマー・アンサンブル1998

1990年以来隔年で開催しているウルマー・カンマー・アンサンブルも、今年で5回目になります。親しみやすい曲を中心に、優れたテクニックに裏打ちされたヨーロッパ伝統の音楽の雰囲気をぜひお楽しみ下さい。

■日時　8/5(水) PM 7:00開演(PM 6:30開場)

■場所　高知県立美術館ホール
(託児室あり・要予約)

■主催：(財)高知市文化振興事業団
ウルマー・カンマー・アンサンブル実行委員会

■入場料：前売り　一般 2,000円　高校生以下 1,000円
当　日　一般 2,500円　高校生以下 1,500円

■お問い合わせ・電話予約：(財)高知市文化振興事業団
TEL 0888-73-4365

[佐川公演] 8月6日(木)　PM 7：00 開演
お問い合わせは佐川町立桜座(0889-22-7878)まで。

プログラム

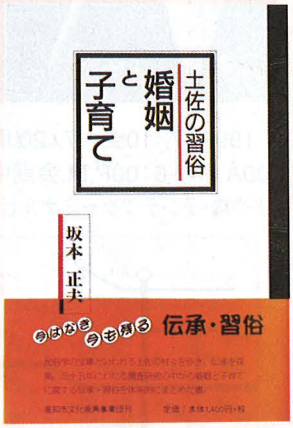
ヴィヴァルディー	合奏協奏曲四季より「冬」	ヘ短調
ヴィヴァルディー	ファゴットのためのソナタ	ホ短調
ドボルザーク	ピアノ五重奏曲 イ短調 第一楽章・第三楽章	
	～休　憩～	
ブラームス	ハンガリー舞曲6番～7番	ピアノ連弾
ポッパー	タランテラ作品33	チェロ独奏
サラサーテ	チゴイネルワイゼン	ヴァイオリン独奏
レハール	金と銀	全員合奏
ヨハン・シュトラウス	ウィーン気質	

※曲目は一部変更になることがございますので、ご了承下さい。

土佐の習俗
婚姻と子育て

坂本　正夫 著

四六判・並製本・200頁
本体価格　1,400円



民俗学の宝庫といわれる土佐の村むらを歩き、土地の古老たちから伝承を採集。三十五年にわたる調査研究の中から婚姻と子育てに関する問題を体系的にまとめた。近代における家族の在り方や人間関係を明らかにした本書は、最近増加しつつある、いじめや非行、キレる中・高校生、子供殺しや遺棄あるいはセクハラ、夫婦別姓、離婚など複雑化した現代社会を理解する際の格好の参考書となろう。

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780-0870 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73-4365
郵便振替01680-5-14869